

功徳を廻施するという考え方

桜 部 建

パーリ経蔵のクッダカ・ニカーヤに収められている『ヴィマーナ・ヴァットツ』と『ペータ・ヴァットツ』の二篇は、一対をなし、どちらも全篇韻文から成る、比較的小部なものである。漢訳やチベット訳の佛典の中にそれに相当するものは存せず、パーリ佛教特有の典籍といつてよい。その成立も経蔵の中でよほど後期に属するものと見られている。したがって従来それほど多く学者の注目を集めることはなかったようである。

兩篇は、ともに、まったく「業」思想をその基礎にしている、と言えよう。ヴィマーナ・ヴァットツの説くところは、主として、天界に生まれてすぐれた容色や幸や富を享けるといふ果報が、前世でなした福業 (*Punya*) あるいは善業 (*Kammakusala*) によつてもたらされたものである、というにある。ペータ・ヴァットツの説くところは、主として、前世の悪業 (*papakamma*) の果として、悪趣に堕ちヤマの世界に属するものとなつた亡者 (*peto duggato Yamalokiko*)、すなわち餓鬼、が種々の苦を受けているありさまと、かれがその苦から脱する道と、に尽きる。したがつて、今、佛教の「業」思想を考察するについで、これら兩書はともかく一つの資料となるものであらう。

二

ところで、一般的にいつて、善因楽果・悪因苦果という「業」の理論の柱になっているのは、いうまでもなく、第一に、「善（悪）の行為がおこなわれた場合には好ましい（好ましくない）報いが必然に生じなければならない」という「業果の必然性」であり、第二に、その報いは厳格に個体的であり一個の行為的主体の上に限られた問題であるという「自業自得性」である。「業」の理論は、この二原則によってはじめて善・悪の根柢が成り立つとするのであり、これはまた、それによって、道徳に心理的根柢を置き、この平常人の世界、出世間 (lokottara) にあいて対する意味での世間 (loka)、の道徳的秩序立てを説くのである。

「業」のこの二つの原則の支配は、当然はなほだ厳格であるが、しかし実は、必ずしも何ものにもひとしなみに機械的に及ぼされるものではなく、また、常に絶対不変なものでもないようである。L・ド・ラ・ヴァレー・プサンが説いた (La morale bouddhique, 1927, Paris, Ch. VII, 3, 4) ように、原始佛典や律典の記述は、確かにしばしばある意味でこの二原則を超える、外れる、あるいは破る、もののあることを示している。

人が殺生などの悪業をなしたのち、それを悔い、向後それを捨棄することを心に誓うなら、これは「悪業の超越 (pāpassa kammaṣṣa samatikkamo)」である、という (S iv 320)。懺悔の力は悪業の果の必然をも超えるのである。そして、続いてその人が慈悲喜捨の四無量心に入れば、「有量の業 (paññakatāṃ kammaṃ)」は「あるいは業が当然そうである程に多くは」の意に解すべきか) その心に残任せず (na avassati) 滞留しなく (na avatīhanti)、とう (S iv 321, D i 251, A v 289)。よく修せられた慈悲喜捨の心は果を引く業の余勢を消去する (あるいは減量する)

のである。兇賊アングリマラーのごとき残酷非道な人も、佛陀に歸しては「そのなした悪業(Gāpāni, kammāni)が善(Kusala)によって掩われ」ることになり、「雲間から出た月のようにかれはこの世を照らす」という(M. ii: 104)。歸佛によって大いなる悪業がより大いなる善に「掩われ」たため、「幾年、幾百年、幾千年、地獄に生を受けたたであろう」はずのかれの業の熟果は軽少ならしめられ、かれはただ、現生において街頭で投石などによる危害を被るという形でそれを受けるにとどまったのである。また、出家者が自恣において罪の告白をなしその罪過を許される(apatti-vuttihana, Mv. iv: 13)ことや、リッチャヴィ族出身の優婆塞ヴァッダが「罪を罪と見て如法に改悔するゆえに」その懺悔が佛陀によって受け入れられた話(Ś. ii: 20)なども、罪の告白や懺悔が、たとえ悪の業果の必然を消し去るほどではないにしても、業障をやわらげる力となることを明らかに示している。

三

右の諸例は、本来必然であり逃れがたく動かすことのできぬはずの悪報が、改悔・修習・歸佛・罪の告白などの力によって、軽減されあるいは消去されることのあることを示し、その意味で、いずれも、多かれ少なかれ「業」の第一の原則を超えるものであると思われる。これに対して、「業」の第二の原則の超越ということもあって、それは、善業の功德がその業の作者以外の者に廻施され得ることによって示される。すなわち、大乘佛教に至って「廻向」(Pariṇāma, pariṇāmana, pariṇāmana など種々の語形であられる。いまは pariṇāmana の形に依っておく)ということによって表わされる考え方の中に含まれるものにほかならない。

大乘佛教で説かれる「廻向」については、およそ二つの意味が区別できるように思われる。その第一は、自己の

功德を廻施するという考え方

善根功徳を自己の菩提に廻向することであり、その第二は、自己の善根功徳を他の人の業苦をやわらげるために、あるいは他の人の菩提に資するために、廻向することである。

第一の場合は、自己から自己へということであるから、いま言う「業」の第二原則を超えるものではないけれども、しかし、それと通常いう業報の善因果果とは明らかに相違がある。善業という因が、楽受を得るあるいは善趣に生まれるという果を感じるのとは、あくまで輪廻の領域の中での有漏の因果の理としてそうであるのに対して、ここでは、行者が、みずから希って、善根功徳を無漏なる菩提涅槃に廻向するのである。もっとも、この場合の *pariṇāmana* の語を「廻向」と解するのはあるいは適當でないのかも知れない。それはもともと、(善根功徳の) 方向を転ずること、(それを菩提に) 振り向けること、の意であるよりもむしろ、(善根功徳を菩提に) 変化せしめること、熟変あるいは熟成せしめること、の意であると思われる。稀な例であるがパーリ経論の中でこの意味で用いられている *pariṇāmin* の語を、註釈家が説明する際、*pariṇāmat* は *paripaccat* と、*pariṇāta* は *paripakka* と言いかえられているからである(舟橋一哉『佛教としての浄土教』八八―九〇頁、九四頁註④。F. Edgerton: BHS Dic. p. 323)。しかし、もしこの *pariṇāmana* の語義がそのようであったとしても、それは、業果の熟することを意味して用いられる *vipāka* の語とは上述の点においてはっきり区別されねばならないし、事実区別されているのである。

さて、*pariṇāmana* の第二義は、自己の善根功徳を他者に振り向けることであるから、この場合には、まさしく「廻向」の訳語が相応する。そしてそれこそは、まさしく「業」の第二原則の超越されることを示すもの、と言えよう。*pariṇāmana* あるいはその類語をこの意味に用いる例はパーリ三蔵には全く見られないので(ただ、功徳を

でなく、施物を「廻し向ける」意で *pari-yāna* の語を用いた例は、律典にわずかに見える（舟橋、同上書、八八頁。Cf. *Mvy* 8415）、これは大乘佛教に至って初めて現われるところ、それもおそらく第一の意味の用例よりも少し後になって見られるところ、と言えるであろう。しかし、それではそういう意味の「廻向」の考え方、「業」の原則の第二を破るような考え方自体、は原始佛典の中に全然存しないかといえは、けっしてそうでない。 *pari-yāna* を語根とする語ではないが、甲のなした善業の功德を乙のために向ける（すなわち、廻施すること）を意味する語がパーリの語彙の中に存するからである。それは *ā-v-dis*（時に *nd-v-dis* あるいは *anv-ā-v-dis*）を語根とするもので、『ウダーナ』『テーリー・ガター』『長部』『増支部』『マハー・ヴァツガ』などにも見られるが、『パータ・ヴァットゥ』にことに多く現われる。またパーリ・テキスト以外に『ディヴィヤ・アヴァダーナ』や『アヴァダーナ・シャタカ』にも見えるところである。

四

パーリ経・律蔵を通じて二三度現われる偈 (*Ud* 89, *D* ii: 88, *Vin* i: 229) の中で、*adisati* は「人が、神々に (*devā*) 施 (*dakkhina*) を (*acc.*) 向ける」ことを意味する他動詞として用いられている。ところがこの偈をよく読むと、それは、人が直接神に向けて何かの施物を奉獻することを云うのではないことが解る。人が実際におこなうのは「戒を具え、自制あり、梵行を行ずる（出家者）たちに食を供する」ことなのである。そしてその布施行（すなわち福業）を、布施者はみずからの意志によって「神々に施を向ける」ようにはたらかせ得るのであり、それによってやがてその人は神々の恵みを受けることとなる、というのがこの偈にいう所の意趣である。別な散文の一経 (*A* VII 50) で

功德を廻施するという考え方

は、一優婆夷が比丘僧伽に食を供養し(bhojanīyena parivāsati)て、その施与(dāna)に対して生ずる功德(puñña)はすべて毘沙門天王の業(sukha)のためになれかしと念すると、それはおのずから毘沙門天王に「施(dakkhina)を向ける(adisati)」効果をもつことになり、やがて毘沙門天王のための「もてなし(attheyya, Sst. attheyya > atthi, a guest)」となる、ということが説かれている。また『テーリー・ガーター』の中に見える(307, 308, 311)ところからすると、世尊の足に触れて敬礼しその身の廻りを右に遶ることによって、人は、他の人に(ここでは別れ去った妻に)「施を向ける」ことを得る、ものと思われる。

初めの二例によれば、人は、直接神々に物などを奉獻することはできないので、出家者を供養するなどという福業、あるいは善業、の功德をもって間接的に、神々の方に「施を向ける」という結果を生ましめ、それによってその人は神を喜ばせ神からの恵みを享受することができるのである。人がそのようにして神に施を捧げるとは、神の側から希望することでもある(A.iv.66)。第三の例からすれば、佛陀に礼拝するという行為はそれ自体大きな福業であって、同じくその功德によって間接的に他に「施を向ける」という効果を生じ得る。そして施を向ける対象は必ずしも神のような存在に限られるのではない。この場合、「施」は、それを望んだ(This 307) かつての妻に「向け」られたのである。

『ペータ・ヴァット』の記述によれば、餓鬼、すなわち悪趣に墮した亡者、に対しても人は直接施物を贈与することができない。衣服をもたぬ女の餓鬼を慰んで衣服を与えようとする商人たちに、彼女は言う。「あなたが手ずからこの手に与えて下さっても、それは私を恵むことになりません(na mayham upakappati)。ここにいるこの優婆塞は正等覚者の信心深い弟子(saddho samma-sambuddhasavako)です。この人に「その衣服を」着ても

らって、「それによって」私に施を向けて下さい (mama dakkhiṇam ādisa)。そうすれば私は幸せとなり、すべて欲するものを与えられることになるでしょう。」と。商人たちはその優婆塞を洗浴させ香油を塗り衣服を贈って「それによって」彼女に施を向けた (tassa dakkhiṇam ādisun)。「向けられた〔施〕 (anudittha)」には即座に「果 (phala)」が現われ、彼女は美しい衣服を着けて眼前に出現することになるのである (Pv I 10)。また、ある女餓鬼の痩せ衰えた姿を「なさけ深い聖者 (muni kārūṇiko)」サーリプッタが見た。サーリプッタは、比丘たちに僅かの食物と布と飲物とを布施して (datvā)、それをもって彼女に「施を向けた (dakkhiṇam ādisi)」。僅かな食物なのに、その「果 (phala)」として、餓鬼の境涯にありながら彼女は一千年の間種々な味の食を享受することになり同じく僅かな布と飲物なのに、その「果」として彼女は大量の高価な衣料と美しい池の水を得ることになった (Pv II)。また、サーリプッタの母も餓鬼の世界 (petaloka) に生まれて飢と渴とに苦しんでいた。「子よ。わがために布施せよ。布施をなして、「それによって」われに〔施を〕向けよ (uddisāhi=ādisāhi)」という母の叫びを聞いて、サーリプッタは友とはかって、四つの小屋を作って、その小屋と食物とを四方僧伽 (catuddiso saṅgho) に布施し、それをもって母に「施を向けた (dakkhiṇam ādisi)」。先の場合と同様に、その「果」が生じてサーリプッタの母の苦患は救われたのである (Pv II 5)。ポッタパーラ長老の父母兄弟も、同じく死して餓鬼と生まれ、飢えに苦しんでいて、それを長老に訴えた。「憐んでくれ。なさけ深い〔お前〕は布施をして、われらに〔施を〕向けてくれ (kārūṇiko datvā anvādisāhi no)」と。そこで長老は、他の十二人の比丘に求めて彼らが托鉢によって得た食をすべて提供し (niyyātehi) てもらう。僧伽を招いてそれを布施して、「これがわが縁者らのためとなれ、縁者たちは幸いなれ (idaṃ me nātman hotu, sukhitā hontu nātayo)」と願いつつ、父母兄弟に「施を」向けた

(*anvādisi therō pitu mātu ca bhāruno*)。「向けられ」た施に対する果として、即座にさまざまな食物が現われ、それによって餓鬼らは安楽を得た、と云う (Pv III 2)。

これらの場合、布施 (*dāna*) をおくる相手としての出家者、僧伽、阿羅漢、あるいは信心深い優婆塞、などは「畑」である。布施者 (*dāyaka*) は「農夫」である。布施される物 (*deyyadhama*) は「種子」である (Pv I 1)。「施 (*dakkhina*) を「向け (*ādisati*, *anvādisati*, *uddisati*)」られた餓鬼 (あるいは神々、時には他の人) はその「果」を享受し、布施者は功德 (*puṇṇa*) によって「増長し」て天界に到る、という。ここに「施を向ける」という語で表現せられている考え方は、大乘佛教で善根功德を他の人 (多くは亡者) に「廻向」するという考え方と、同じ線上にあることは疑いない。そしてそれが厳密な意味での「自業自得」の原則を超えるものであることも、明らかである。

(昭和四十九年度文部省科研「総合研究」による成果の一部)